

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第35回 第9.4節～第9.5節

2019年6月1日

小田 勝

この補遺稿はとかく類例の提示が多いのだが、前々回の補遺稿（第33回）で示した「8.3.5' 単独名詞の発声(新設)」のように、新しい項目の発掘と、記述の精度向上に、できるだけ努めたいと思う。

例えば、184頁「7.2.3 聴覚に基づく推定」では、「音がしないことによる推定」の例をあげるなど。

- ・傍^{かたは}らなる所(=隣ノ家)に前^{まへ}駆^き追^おふ車とまりて、「荻の葉、荻の葉」(=隣家ノ女性ノ名)と呼ばすれど、答^{こた}へ^こぎ^ぎなり。(更級)
- ・「しづまりぬ^ぬなり。入りて、さらば、たばかれ」とのたまふ。(源・空蟬)

このついでに、今までの補遺稿で扱った第2章～第8章の範囲で、その後気づいた事項・用例などを少し補っておこうと思う。

39頁「2.3.1 イ音便」。現代共通語では、「-く」で終わる五段動詞のうち、「行く」だけは例外的にイ音便にならないが、古典語には存する。

- ・検非違使ども河原^かに行^ゆいて(宇治2-5)

48頁「2.5.1 動詞の意志性」。次例の「書き落とす」は意図的に書かないの意である。

- ・その間^{あひだ}の次第はいかにとも書き尽くすべきことならず。ただ推^おし^し量^{はか}りつべし。大事^{おしごと}の節々^{せつせつ}ならぬことはその詮^{せん}もなければ、書き落とすことのみあり。(愚管抄)

53頁「2.6.4 現代語と格支配の異なる動詞」では、「補遺稿」第4回で、「現代語と格配置の異なる例」を補ったが、次のような例もあった。

- ・小さき手を顔^{かほ}に(=小サイ手デ顔ヲ)おほ^ほひ、なほ父を慕^もひ泣^なけば(西行物語)

次例の「AにBをひき重ねて」は、「Aの下にBをひき重ねて」の意であろうが(直衣は上に着るものである)、こういう表現も現代語ではしない。

- ・[源氏ハ]桜の御直衣^{みぢぎ}にえならぬ御衣[ヲ]ひき重ね^かて(源・薄雲)〈大系傍注「[上は]桜の御直衣に、[直衣の下には]えならぬ御衣ひき重ねて」〉

58頁「2.9 軽動詞」。動詞の前に「す」を添えて、「し+動詞」の形にすることがある。

- ・はかなくし集め給へる手習などを破り給ふなめりと思ふ。(源・浮舟)
- ・御衣掛の御装束など、例のやうにし懸けられたるに(源・葵)
- ・女の御装束など、色々によくと思ひてし重ねたれど(源・東屋)
- ・惟光召して、御帳、御屏風など、辺り辺り(=アチコチニ) し立てさせ給ふ。(源・若紫)
- ・竹編める垣しわたして(源・須磨)

106-109 頁「4.3.7 え…ず」の後に節を新設する。

4. 3. 7' …とも…打消(新設)

同じ動詞を「…とも…打消」の形で繰り返して、「…できない」ことを強調する表現がある。

- (1) 「今は逃ぐとも逃ぐまじかめり」と思ひて(今昔 25-7)

さて、「9.4 選択疑問文」の 254 頁の続きからであった。同じ動詞の連用形を「肯定形+否定形」と連ねた形は、「…であるか、…でないか」の意である。

- ・かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる(古今 705)
- ・散り散らず聞かまほしきをふるさとの花見て帰る人も逢はなむ(拾遺 49)
- ・咲き咲かず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思ひし(後撰 61)
- ・待ち待たぬ人の心を見むとてや山時鳥夜をふかすらん(頼政集)

これらは主として和歌にみる語法であるが、散文でも使用例がある(歌集の詞書であるが)。

- ・二月の二十日あまりのほどに、南殿の花、咲き咲かず見むとて参りたる折しも(頼政集・詞書)

二つの対象を比較して優劣の判定を求める選択疑問文において、比較の基準が表示されないことがある。

- ・来や来やと待つ夕暮れと今はとて帰る朝と [ツラサハ] あした づれまされり(後撰 510)
- 第 9.4 節の後に、節を新設する。

9. 4' 間接疑問文(新設)

主文内に従属節として埋め込まれた疑問文を間接疑問文という。

- (1) 見渡せば沖の潮路に雲ひちて(=雲ガ低ク垂レテ海ニ浸ッテ) 空か海かも分きぞ
かねつる(歌合 162 広田合)
- (2) 何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる(西行法師歌集)
- (3) 竜田山花の錦のぬきをうすみ咲くか散るかにまよふ春かな(土御門院御集)

◆次例は引用句の形式をとっているが、「夢とはどんなものかを知りたい」と同意。

- ・寝るがうちに思ひのほかのことも見つ夢よいかなるものと知らばや(続古今 1800)

次例のような従属節中の「とや」は、不確かな想像を表す。

- (4) ひらけぬを(=蕾ノママデ開花シナイ菊ヲ) 秋果てずとや見し菊の(=秋(飽キ)
果テズトカ見タ菊ガ) 頼むかたなくうつろひにける(頼政集)〈詞書「さて後ほど
経てうつろひたる菊に付けてかれよりつかはしける」〉

「9.5 疑いの文」の 255 頁。最初の◆の第 1 例の類例を追加する。

- ・大き海の奥処も知らず行く我を何時来まさむと問ひし兒らはも(万 3897)〈類例、
万 4436〉
- ・「何人ならむ」と問へば、「……」と言ふ。(源・明石)
- ・「雛の殿はいかがおはすらむ」と問ひ給へば、人々笑ひて「……」など語る。(源・
野分)
- ・「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひ給へば(平家 3・無文)

また、問いを表す句型で疑いを表すこともないとはいえない。

- ・阿難が光放ちけんを、二たび出で給へるかと疑ふさかしき聖のありけるを。(源・
紅梅)
- ・「雨もやいたく降り侍ると思へば、神の鳴りつる音になむ、出でてまうで来つる」
と言ふを聞くにも(蜻蛉)

同頁、3 つ目の◆の類例を追加する。

- ・「つららとち駒踏みしだく山川をしるべしがてらまづや渡らん
さらばしも(=ソレデコソ)、影さへ見ゆるしるしも(=私ガ訪ネル甲斐モ) 浅うはあ
らじ」と[薫ガ大君ニ] 聞こえ給へば(源・椎本)